

「水深川静」の言葉とともに

長谷川徳次

私が大平さんを知るようになったのは、昭和二十七年、大平氏が政界に出馬して間もなくのことであった。

如水会の午餐会の席上で、話はたまたま政界の動きに及び、大平氏は池田勇人氏を評して、「うちのおやじは何でも思っていることをズケズケいう荒削りのところがあり、総裁は無理だと思うが、もし推薦されれば味の異なる異色の総裁になると思う」といわれた。私はそのとき、「これはなかなか面白いことをいう男だな」と思い、それからの政界における大平氏の動きに注目するようになった。

昭和三十五年に池田総裁が誕生し、大平氏は池田内閣の官房長官に就任したが、その頃から政治家として次第に頭角をあらわし、「寛容と忍耐」の池田総理を助け、戦後の日本経済の再建に輝かしい業績を残した。

昭和四十八年の石油ショックの直後、大平氏は田中内閣の外務大臣として、正月早々、日中航空協定交渉のために訪中されたが、私はそのときたまたま家族とともに正月休みを香港で過ごしていて、外相が私どもの泊っていたマンダリン・ホテルに投宿されたことを知り、一月二日の午前に大平外相の室を訪ね、三、四十分ほどよもやま話をした。「正月早々、航空協定の交渉に厳寒の北京に行かれるのはご苦労様ですね」とねぎらいの言葉をかけたところ、大平さんは「航空協定の問題は台湾のことがからむのでなかなか厄介ですよ」と苦笑されていた。昭和五十三年三月に、国策研究会は、当時自民党の幹事長をされていた大平氏をゲストに迎えて、「日本経済と政局の展望」について講演をしてもらったが、私は開会の挨拶として、「大平さんはこの頃はつきり物をいう

よつになった（一同笑う）と大変評判がいいが、今日は非常時の経済政策と政局の展望について、是非、私どもに解るように、忌憚のないお話を承りたい」と大平氏を紹介した。

当時、新年度の予算修正をめぐる、与野党は攻防の最中であつたが、大平氏はいつになくはつきりした調子で、外相から蔵相時代にかけて、大平氏が石油ショック克服のためにとつた経済政策の展望から説き及び、与野党間の論議に話を移し、「具体的な対策なり政策展望の根底に、今日の事態をどう見るか、こうだからこれに對する処方箋はこうあるべきだという、しっかりした筋道がなければならぬと思つ」と力説された。当日の一時間余りの講演は、福田内閣時代の自民党幹事長としての堂々たる所信表明であり、聴衆の胸を打つものがあつた。

大平氏はその年の十二月に自民党総裁に就任し、翌年六月には東京サミットの議長をつとめ、さらに諸外国を精力的に歴訪して首脳外交を展開したが、その後の国内政局の動きは、大平さんにとって、必ずしも坦々たる道ではなく、昨年の五月には、衆参両院の同時選挙となり、大平さんは心身の過労のために遂に病魔に冒されることとなつた。首相のご病氣は、絶対安静を要し、入院中は面会謝絶でもあつたために、私はお見舞いにもうかがわずに、かねての予定に従つて、中国に旅立つたが、私どもが、六月十二日の午後、蘇州駅で少憩していたときに、案内役の朱金諾君から緊急情報として、「今朝大平首相が急逝された」ことを知らされ、異国で突然この悲しい知らせを受けて、私はしばし茫然となつた。

大平さんの一生は決して長いものとはいえなかつた。対外的には首脳外交を推進し、国内では財政再建を始め田園都市国家構想の具体化など、幾多の重要案件を抱えて、胸中はただ無念であつたこととお察しするが、日頃よくいわれていたように、人間らしい人間として、大平さんの充実した美しい七十年の生涯は、私の好きな「水深川静」のお言葉とともに、しっかりと私の心のなかに残されている。

（三菱アルミニウム相談役）